第 11 回福田徳三研究会
2012 年 1 月 30 日（月）

『福田徳三書誌』について [1]

金沢　幾子

（大月康弘）　それでは時間も過ぎましたので、そろそろ始めたいと思います。今日はお忙しいところ皆様お集まりいただきましてありがとうございます。この福田徳三研究会でございますけれども、いろいろな方から、福田徳三のみならず、一橋大学の創立期の学者ないしは卒業生の皆さんについてのご研究の成果をお話しいただくことになっています。

今日は、他ならぬ我々のコアメンバーのおひとりである金沢さんからお話を伺う機会になりました。皆様ご承知のように、お手元におありだと思いますけれども、昨年『福田徳三書誌』という浩瀚な出版をなさったところです。この『福田徳三書誌』は、金沢さんが追ってこられた福田の足跡、また福田に関する研究のあり方についての、いわば総決算的な作品と拝見しています。これを我々メンバーが通読してから、ということになりますとこれまた大変なことになりますので、今日はまだ全体を拝読していないタイミングで、ということで勘弁いただきたいと思います。ともあれこの『書誌』を編集され、また解説をお書きになる過程の中で、いろいろなご苦労もおありだったかと思います。またいろいろな思い出もお持ちだと思います。今日はそのあたりのことを、ざっくばらんにお聞かせいただきたいという次第です。年度末のお忙しいところだったのですけれども、曲げてお願いを申し上げた次第です。それでは早速、金沢さんからお話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

（金沢幾子）　この『福田徳三書誌』は、ただ、こつこつやってきたものの集積みたいなもので、こつこつ仕事をする分には一向に苦にならないたちなのですけれども、人前でお話をするなどということは苦手ですし、ほとんどそういう機会もありませんでした。今日のお話も皆様のご期待に沿うようにきちんとできますかどうか心配ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

この『書誌』ができるにあたっては、杉原四郎先生を抜きにしては語ることはできません。そういう経緯などをお話しすることをひとつの柱として、また大阪市立大学の福田徳三文庫の献呈本の調査もいたしましたが、1 回目は西沢先生の三菱財団助成金、それから杉さんとご一緒しました 2 回目は一橋大学戦略推進経費からの助成金をいただいておりますので、献呈本の調査についての報告を第 2 の柱として話したいと思っております。

[1] 発言者は発言の順に、金沢幾子、大月康弘、杉岳志、江夏由樹、西沢保、田崎宣義、酒井雅子。

Ⅰ．『福田徳三書誌』について

1）『福田徳三書誌』ができるまでの経緯や背景

はじめに杉原先生についてですが、一橋大学の細谷新治先生が経済資料協議会において『経済資料ハンドブック』を編纂・刊行しようと計画され、私は雑誌の部門を担当することになりました。残念ながらその企画は幻に終わってしまいましたが、ちょうどそのころ、杉原四郎先生が東京大学に内地留学をなさり、宮武外骨の明治新聞雑誌文庫に通われて、雑誌研究、特に経済雑誌研究をいろいろ発表なさいました。私はそうした論文を読むにつれ、経済雑誌の年譜を何とかまとめたいと思い、杉原四郎先生にご教示をお願いしたのがそもそもの始まりになります。

杉原四郎先生には、1987 年にお願いしましたが、先生はお手元の資料とか、古書店の目録の切抜き、地方の図書館の展示目録ですとか、そういう普通では入手できない貴重な情報を毎週のようにお寄せ下さいました。そして、その年の 5 月にご病気で倒れられ片脚に麻痺が残ってしまわれましたが、入院中も欠かさずお手紙を下さるなど、私にとって杉原先生のご恩は忘れられないというよりも、とにかく杉原先生のおかげでその成果を「明治期経済雑誌年表」[2] としてまとめることができました。その恩人の杉原先生が、河上肇については書誌学の大先輩である天野敬太郎先生の『河上肇博士文献志』(1956) ができているけれども、そのライバルである福田徳三についてはほとんどないので、その書誌を作ったらどうかとお勧め下さいました。

『福田徳三書誌』の「はじめに」に書いてありますとおり、まずは一橋で刊行したもの、福田が一橋に提出したものとか、一橋絡みのものでまとめたものがあります [3] 。その後は、福田先生の手稿類が、今では附属図書館に移されましたが、当時は社会科学古典資料センターの 3 階の書架と書架の間にふたつの粗末な木箱の中に入っておりました。それを土曜日の午後とか、少しずつメモを取っていき、「福田徳三手稿類について」として、『一橋論叢』105(6)：1991.6 に発表いたしました。

このときは山田雄三先生にご連絡を取ってご教示をお願いしました。山田先生は福田先生を取り上げてくれるのは嬉しいと喜んで下さり、大学に見えるたびにわざわざ私のところまで足を運んで下さいました。山田先生の中野のご自宅に伺ってお話を聞かせていただいた折、山田先生の蔵書は東京経済大学に寄贈なさいましたが、お手元に残しておかれた手書きの福田先生の受講ノートをあげようと言って下さいましたので、これは大事なものと思い、附属図書館にすぐ寄贈の手続きを取りました。山田先生は福田先生の講義を聴くときは一切メモも何も取らずに一生懸命聞いて、お宅に戻ってから、その記憶を頼りにまとめられたもので、本当にきれいなノートでした。山田先生の記憶が衰えなかったのは、

---

[2] 『経済資料研究』no.21：1989.3　pp.1-100。
[3] 「福田徳三書誌：一橋関係を中心として」:『一橋論叢』102 (6)：1989.12。

そういうふうにして講義を一生懸命お聞きになり、そしてまたご自分できちんとまとめられたからなのでしょうか、本当に貴重な記録だと思います。

また、福田徳三の手稿類を私より以前に、当時は東大の院生で、現在は早稲田大学教授の宮島英昭先生が調査なさいましたが、自分の福田研究は私の書誌的なものとは全然違うものだからと言って、ご自分のメモノートを惜しげもなく貸して下さいました。このように、私はいろいろな方々のお世話になって、この『書誌』を作り上げることができたと思っております。

日本経済評論社が田口卯吉の『東京經濟雑誌』の復刻版を刊行後、それに関する研究書も出そうと企画して、『田口卯吉と「東京経済雑誌」』という本にまとめたのですが、その企画の集まりのときに、私はおっちょこちょいで、索引がないと膨大な雑誌は引きにくい、もし索引を作るようなことになればお手伝いしましょうなどと言ったものですから、やはり索引を出した方がよいということになりました。

『評論』（日本経済評論社）185 号の「神保町の窓から」に栗原社長が書いておりますが、日本大学の経済学部や商学部の図書館員ですとか、図書館問題研究会の私立大学のメンバーが多かったのですが、「東京経済雑誌」1879（明治 12）年から 1923（大正 12）年の 45 年間分の記事 1 件毎のワークシートを作って、私がチェックするというような作業が 8 年ほど続きました。そのときも分類に困ったり判断に迷うことがありますと、西沢先生に電話を差し上げて相談に乗っていただいたりもしました。宅急便の費用以外はいっさい手弁当で作業をしましたので、栗原社長が恩義に感じられて、今回、書誌という地味なジャンルでそんなに売れもしない、特に出版事情が難しい中、この頁数の多い『福田徳三書誌』の出版をあえて引き受けて下さいました。

杉原四郎先生のお勧めにもよりましたけれども、私自身、福田博士の書誌作りをしながら、いろいろな文献を読んでいきますと、やはり経済学、社会学・法学・歴史などの学問分野の系譜上、非常に大きな影響を及ぼし、特に近代経済学においてはその役割がとても大きかったことを感じました。また、社会政策学会や大正デモクラシーの発端に関わる黎明会を起こし、社会福祉や労働運動の分野においても、人権保護ですとか福利厚生などのために尽力した「行動する学者」であったということにも打たれました。さらに、福田徳三先生の追憶、お弟子さんたちの追憶文を読みますと、とにかく学者として、教師として、熱情を持って人に感銘を与え、何よりも学問を究めたいという思いを人に起こさせる方だったということに感銘を受けました。図書館員というのは、利用者と資料の仲立ちをするのが役割ですので、何とかしてこの福田先生の業績を伝えて、次世代の研究者なり、福田先生を知りたいという方たちに伝える役割を果たせたらと思って、この作業を進めてきました。

そして、先ほどもいろいろな方の支えがあったからということもありますが、一橋大学

の図書館員として、この社会科学関係の優れた蔵書を持つ図書館に自由に出入りして、資料を自由に利用できる環境にあったという恩恵を受けたから出来たことだと思っております。また、この図書館に所蔵する非図書資料の整理や保存とか、そういう仕事に従事させてもらったことも、この『書誌』をまとめるうえでとても役に立ったと思っています。そういう意味で、私は人にも資料にも非常に恵まれたと感謝しております。

２）『福田徳三書誌』の特徴

この『書誌』の特色としては、第 1 には「読める書誌」にしたいと思ったことです。普通の書誌は文献リストといってよく、タイトルと著者・出版社・出版年・ページ数ですとか大きさとか、そういう書誌的情報がメインなもので、たまに解説がついたりしますけれども書誌自体はともすれば無味乾燥なものになりがちです。この『書誌』は、一般の方々も読めるような、そしてこの書誌全体が福田先生の一つの伝記的な役割も果たせればいいなという思いもあって、「読める書誌」を心掛けました。

「大塚先生が福田徳三博士の伝記を書いたとしたら」という『大塚会会報』38: 2011.8 に寄せたものが皆様のお手元にあると思います。大塚金之助先生は昭和 12（1937）年に名古屋で開催された「福田博士記念学術講演会」の後、懇親会の席上で福田博士の伝記が問題になり、大熊信行先生から執筆担当者として大塚先生の名前が出たということです。大塚先生は、もし自分がそういう伝記を書くとすれば、福澤諭吉・田口卯吉・福田徳三・河上肇、この 4 人なら書いてみたいと思ってぼつぼつ書物や記事を集めていらしたということです。大塚先生が恩師の坂西由蔵先生に宛てた手紙では、一応世界の大経済学者の学説と伝記とを勉強した後で余生があって福田伝を書くとしても、個人として一学徒として書くつもりで、福田会員として書くつもりはないということを強調していらっしゃいます。そして伝記などを問題とするよりも、福田博士の日記や未完成稿等々をきちんと保存することの方が大事なのではないかというふうに伝えております。残念ながら大塚先生は福田先生の伝記を書くことはできませんでしたけれども、今現在、福田先生の手稿類は中性紙保存ケースに保存されていますし、デジタル化も進められています。大塚先生が懸念なさったことはずっと時が経って、本当に最近ですけれども、実現されております。

また、福田先生が恩師のルーヨ・ブレンターノに宛てた書簡も、その存在を教えて下さったのは関西学院大学の早島瑛先生でしたが、西沢先生がコピーの労を執り、さらに院生の柳沢のどかさんに翻刻と翻訳を依頼なさって、それに西沢先生が校や注をお付けになって『福田徳三―ルーヨ・ブレンターノ書簡　1898-1931 年』という優れた資料が出ました。これによって、私の書誌作りもずいぶん情報が増えましたし、何よりも福田先生の恩師ブレンターノに対する生の声といいますか、そういうものに接して、非常に勇気づけられたというか、励みになりました。

【年譜】については大塚先生の記事にあるとおり、福田先生の日記が存在していたことは確かですけれども、私が山田雄三先生からお聞きしたときは、東京大空襲でみんな焼けてしまったということでしたので、書簡類以外は同時代人の公刊された日記や著作や伝記などから採らざるを得ませんでした。

上田貞次郎先生は日記ですとか伝記がありますし、関一は日記や留学時代の日記が残されています。左右田喜一郎は著作集や伝記、吉野作造も日記や著作集を参考にし、高野岩三郎先生も伝記を、河合栄治郎先生も日記や著作集、堀江帰一先生も著作集の中から日記の部分を、小泉信三も日記や伝記・全集、高橋誠一郎は著作、ずっと時代が下がったところで、中央公論社の編集者木佐木勝の日記などを読んで、日付が確かなところをなるべく採用しました。

「大塚先生が福田徳三博士の伝記を書いたとしたら」にちょっと書きましたが、上田貞次郎先生のご長男の上田正一さんの『上田貞次郎伝』などは時代背景を視野に入れて、非常に冷静かつ率直な伝記をまとめられており、とても参考になりました。それと『木佐木日記』でも、『中央公論』や『改造』『解放』などの対比ですとか、大正期の思潮が昭和に入ってすぐに衰退していくことなどを鋭く感じ取った日記なども参考になり、面白く読んだことでした。

【著作年譜】に関しては、論文や記事の最初に掲載された情報から、それが次にどういう本に収められて、それが全集に収められたか、収められてないとか掲載の変遷を分かるようにしました。本人以外の著作に収録されたものは、原文が入手できない場合もそれで代用できるように、なるべく分かった情報は載せるようにしました。また、同時代人の書評や、論争や批判情報も掲載するようにしました。

その他に後世の研究者が福田の論文についてどういうことを研究したり言及しているかを時代順に並べ、かつその研究の一部を引用して福田の著作の概要や特色を伝えるとともに、参考文献としての研究書の案内も果たしたいと思いました。論文によっては長々とページ数をとったものもありますが、そういうガイドブック的な役割も持たせました。

【内容目次】については、改訂版とか発行者が異なるものがありますので、同一の著作はなるべく一緒にグルーピングして、それがどういうふうに違うかをページ付けの異同も含めて表を作ってまとめました。

【人名索引】も、当時の人たちにはその人物がどういう人か分かったかもしれませんが、今現在は有名人は分かりますけれども、そうでない場合は分かりませんので、肩書ですとか、所属機関情報とかをなるべく載せるようにしました。

【論題索引（付年譜関連索引）】については、私が『一橋論叢』132(4)：2004.10 に発表したときは、論題索引しか載せていませんでした。普通、論題索引はタイトルがあって、それがいつ出されたものかという年月日を載せていますから、そこの年月日のところをたどって行けばいいだけなのですが、その論文や著作のできる背景ですとか、あるいは著作が刊行されたときに、どういうことが起こったとか、年譜上で関係する年月日もそこに添え

ておきました。当初は、「年譜」と「著作年譜」とを並行に掲載して相互に見ることができればいいなと思っていたのですが、あまりにページ数を取りますし、すぐ近くに互いの情報が載るわけではないので、相関索引的なもので補うより仕方がないと思って作った索引です。自分としては、これを作ってよかったと思っております。

【被伝書誌】について、書誌としては「年譜」「著作年譜」「被伝書誌」（福田を取り上げた他の方たちの著作リスト）が 3 本柱になります。『福田徳三書誌』では、最後の方に被伝書誌を掲載しております。またたとえば 778 ページ、石橋湛山のところに大きな米印が付いています。福田の論争の部分にももちろん掲載してありますが、こちらの被伝者の方にもこの論争に絡んだ情報を載せておくようにしました。

【典拠】については、全部の項目にはできませんでしたが、なるべくそれに拠ったという情報の典拠を掲載して、その記事のもとはこれを読めばいいという情報を載せるようにしました。

【関連リスト】には、その他、活字として残らなかった講演とか演説とかがありますので、「講演・演説リスト」を作成しました。また、福田徳三がどういう雑誌や新聞に載せたかという「掲載紙誌リスト」も作りました。献呈本については後で触れますが、どういう方からどういう本が福田へ奉じられたかの「献呈本リスト」。それから、「福田徳三による書評・紹介」、その逆の「福田徳三の著作に関する書評・紹介」とか、こういうものは本来は著作のところに載せてもよかったものですが、非常に部分的でしたので、3 本柱からは外して関連リストとして収めました。

【終わりに代えて：福田徳三断章】について、最後にちょっと大げさなタイトルを付けたのですが、福田先生の紹介として、図書館員でなければあまり取り上げないであろうことについて、世界の名著アンケートですとかペンネームや住所のこと、献呈本・図書館・蔵書目録・索引・月報などについて、私なりの感じたことをまとめました。

この中で、『福田徳三―ルーヨ・ブレンターノ書簡』において西沢先生がちょっと触れておりますけれども、福田先生は結構引っ越ししております。晩年は中野に移りますが、それまでの間、千駄ケ谷をあちこち移動します。この間福田先生の妹の水田満喜様のお孫さんにあたる野間口様とお話ししていて、千駄ケ谷の地を離れ難かった理由が推測できました。福田先生の妹の満喜様は、立教女子部を卒業後、今の東洋英和で先生をしました。この『書誌』ができてから、野間口様から東洋英和の『五十年史』に掲載されている箇所をご教示いただいたのですが、授業としては日本語と『聖書』の同時通訳、また外国人の先生方に日本語を教えるという役割も担当しました。福田先生も語学の達人でしたが、妹の満喜様も非常に語学ができて、やはり同じく語学に優れた水田榮雄氏と結婚され、福田先生も水田さんをお気に入りで、よく交流なさっていたそうです。その水田ご夫妻のお宅が、今でいえば代々木の能楽堂のあたりと伺いました。ですから、福田先生のお子さん方と水田ご夫妻のお子様方とはいつも一緒におることが多く、頻繁に行き来があってご飯もみん

なご馳走になったりしたのでしょう。子どもたちのためにも、自分と水田家との交流のためにも、千駄ケ谷は離れ難い地であったわけです。

野間口さんのお話ですと、おばあ様にあたる水田満喜様は、非常に静かな方だったそうです。私には徳三の母親の信子がそういう方のように思われましたのと、野間口さんから満喜様の思い出話を伺ったときに、あくまでも私個人の感想なのですが、信子が杉本鉞子の『武士の娘』[4] のような心持ちを持った方だったのではないかという思いを強くしました。福田徳三は姉の方の意見を取り入れて一橋で学ぶことになったわけですが、後半は妹とのつながりがとても強かったように思います。

「世界の名著アンケート」というのも、私が一橋に勤めていた間に丸善の 100 年事業があって、『丸善百年史』が刊行されましたが、なかなか読む機会がありませんでした。やっと読むことができ、福田徳三が留学から戻ってきて間もなく、世界の名著アンケートに答えていることが分かりました。それは、丸善の名著アンケートに直接答えるようなものではなく、ドイツで学んだ福田が経済学・社会学関係のお薦め本としてどんなものがあるかというリストを載せただけのものです。それからずっと遅れて明治 42 年に『時事新報』がやはり「内外百書選定」というアンケートを取ったときには、文学書は避けるがどんな人でも一度は読んでもらいたいものと、かなり一般的な本を挙げております。面白いことに、『資本論』は福田が原書を読んだりして、堺利彦らマルクス主義者・社会主義者たちにも一目置かれていたのですけれども名著としてそれは挙げずに、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』を挙げております。『資本論』は専門家以外には分からない、「決して一般的に必読というべき性質のものにあらず」と書いてあります。福田が挙げたいくつかの書は、ランキングとしてかなり上位に入るものがありますので、『時事新報』の方はアンケートに沿ったものを回答したといえます。

とにかく本を収集するには熱心だったということでは、社会科学古典資料センターの助手をしていらした岡崎義富さんが板垣與一先生から聞いた話として、福田先生は海外へ直接図書の注文をなさっていて、たまたまその小包が届いたときに、まるで一分一秒も待てない様子で興奮してバリバリと包みを破ったという、それぐらい書物に関しては非常に熱心、関心が強かったという情報を今回寄せてもらいました。マキャヴェリ関係の書籍だったのではないかということでした。

『マルクス全集』を刊行するにあたって、「書物における索引の必要」というものが刊行されました。884-～885 ページ目に簡単に要約を載せましたが、「日本では出版する図書の多くは索引を欠いていて暗中模索の嘆きを免れない」と。マルクスの全学説を一目の下に置く方法がないから同一問題も多方面から扱われて学説も矛盾して見えるようなのだけれども、ちゃんとした索引が出たらきちんとした研究ができるだろうということ、ドイツ語・仏訳にも索引がない、英訳の『資本論』の索引は簡単すぎるからちゃんとした日本語の索

[4] 原文は英語。大岩美代訳　筑摩書房 1967　筑摩叢書。

引を作りたいと、いろいろ書いております。こういうことにも福田先生の見識が窺われると思います。

３）書誌作りに苦労した点

私がこの『書誌』を作るにあたって苦労しましたのは、年月日の特定が非常に難しかったということもひとつあります。福田先生ご自身ちょっとおっちょこちょいで、ご自分の父親の亡くなった年月日も、自分の留学時期も間違えたりしておりますし、著作の発表年月日にも間違いがあります。また『福田徳三先生の追憶』の中でも、アダム・スミスの研究会などは複数年に渡ったこともありますが、他にも定かでない情報もあったりして、採用できないものやもったいないなと思いながらも削らざるを得ないものもありました。

索引がないと福田先生が言及しておりますが、やはり索引がないためにしらみつぶしで見なければならないことが多くありました。最近は朝日の「聞蔵」（データベース）なんかができたりしていますが新聞記事索引が非常に少なくて、読売新聞の索引ができたときは一橋では入れてなく、東京学芸大学が買っておりましたので、それを参考にさせてもらいました。そういう索引も福田が著者であったりとか、タイトルに福田の名前があったりしたものは採り上げられますが、福田のことについて、その中身についてまでの索引はなかなかできていない、そういう不便さがあります。

神戸大学の新聞文庫も便利に参考にさせてもらいましたが、いざ現物を見ようとしますと、切抜き帳が元ですので、切抜きの段階や、あるいは入力したときの転記ミスがあったりして、なかなか現物にたどり着けないこともありました。

雑誌の目次情報も、東大の明治新聞雑誌文庫が所蔵する雑誌類の目次が復刻されて、ずいぶん作業が楽になりましたが、やはりそこに載らない情報があります。他の文献を読んで見つかったり、あるいは勘で絶対載っているのではないかと思ってコピーを依頼すると載っていたりだとか、そういう苦労がありました。特に現物を入手する ― 現物貸借や複写にしても、個人には限界があり、やはり現物を見ることの難しさを痛感しました。

また、コンピューター能力がないために苦労した点もあります。最初はワープロを使って入力したものを西沢先生のおかげでパソコンに変換してもらいました。その後 Excel に変換となり、欄内に情報を詰め込んで行きましたが、出版段階では Excel からいったん Word に変換して渡さなければなりませんでした。けれども最初から Word でなかったために、出版形式で出そうとするときれいな形にならず、初校・第 2 校までは形式を整えるのにエネルギーをとられ、内容のチェックは 3 校あたりからと、全部で校正は 6 校から 7 校やりましたが、実質 4 校から 5 校できたという程度になりました。

そのうえ、あんまり長い間かかりましたので、いろいろいじったりしているうちに情報がどこかへ飛んでしまいたどり返せなかったり、典拠情報が分からなくなったりして、不十分なものができてしまったと忸怩たるものがあります。

Ⅱ．献呈本についての報告　（献立表、蔵書印・受入印・献呈の辞の資料を回覧）

献呈本については、大阪市立大で 2 回にわたって調査しましたが、2 回目は杉さんにご一緒してもらいましたので、達筆で読めない部分を教えていただいたりして、とても助かりました。

「おわりに代えて」のトップに載せてありますが、福田文庫を調査したときに『対症食餌療法』という本の中に、毛筆書きで冬の部として 1 週間分の献立表をたまたま目にすることができました。いつのころに作られた献立表かといいますと、福田博士の入院されていた時期にあたるものです。本当はその病院の調査もしなければならないのですが、昔の入院は今みたいに食事がきちんと付いてなくて、家族がその食事を作ったり、面倒を見ていたのではないかという気がします。献立表にはとく夫人の苦労が忍ばれるような思いがしました。

福田徳三の蔵書印ですが、初期のころはちょっと小ぶりな真四角に 3 行仕立ての「中野本郷」「福田徳三」「百一番地」という蔵書印、それから大正 10 年ごろになりますとちょっとそれが大きくなります。それから大正 11 年には似ているのですが、大きさとかちょっと違うように思い、蔵書印は 3 種類と判断しました。日付受け入れ印も、縦書き、横書きのスタンプがあり、住所入りのもありますが、たいていは手書きです。「おわりに代えて」にも書いてありますが、せっかく蔵書印を作ってもあんまり押しているものはありません。先ほど板垣先生が外国から本が届いたとき、福田先生が 1 分 1 秒も待てないようなありさまを伝えましたように、悠長に蔵書印を押して丁寧に扱うなんていうことは、ちょっと福田博士としてできなかったのではないかというような気がします。とにかく手書きでぱっぱと処理するような印象を受けました。

献呈本で私がコピーをお願いしましたのは後の調査のためのもので、全部ではもちろんありません。回覧しますが、東大の明治新聞文庫を作った宮武外骨の養子になった板橋菊松さんの献呈の辞は、こういう感じです。

上田貞次郎先生、これは貞次郎の字が以前に使用していた「貞二郎」になっております。「謹んで」、それから「仰ぐ」、その次が「斧」と「正す」という字です。斧を振るってばっさりと忌憚ない意見をというような気持ちだったと思うのですけど、この斧という表現を取っていることに、当時の方たちはそういう言葉を使っていたのでしょうけれども、ちょっと驚きました。

内田銀蔵先生の分は、論文にただ「謹呈　内田銀蔵」と書かれておりますが、そのお人柄を示すような文字です。

福田先生があまりお好きでなかった大西猪之介、それはふたりとも似た者同士だからといわれているのですが、その大西先生は非常に繊細な文字で福田先生に捧げております。

慶應の塾長をした鎌田栄吉はこういう立派な字体です。

河上肇は『祖国を顧みて』という本を福田先生に捧げるときに、福田が外地から戻ってきてすぐに京都大学で特別講演をしたので、「特別講演を終えられた日に」というふうに一言お書きになっています。

小泉信三は『経済学説と社会思想』というふうに、「近々根本的に増訂を試みるけれども、この本には誤植などいろいろあるが、取りあえずお送りします」というようなことを書いております。

マルクス経済学者の佐野学も、翻訳物ですけれども『マルクスかカントか』を出したときに、献呈しております。

下村宏は『人口問題講話』に、「福田徳三学兄　恵存」と書き、サインが私には読めなかったのですが、さすが杉さん、海南という号と読み解いてくれました。

福田徳三のペンネームについてのところに書きましたが、福田徳三は「輪南生」とか「浜の人」ですとか「三素学人」も使っておりますけれども、「直入」という号も用いています。これについて、菅禮之助は「一跳直入」という禅語に由来するのではないかと言っております。左右田喜一郎が 2 つの論文を福田に献呈するときに、「直入先生」と書いてあります。調査不足かもしれませんけれども、他の献呈者でこういうふうに記載した人は見当たりませんでしたので、「直入先生」と呼び掛ける左右田と福田の師弟関係がうかがわれるような気がして、貴重なのではないかと思いました。

鈴木梅四郎といって、お医者さんで福祉事業にも取り組んだ方がおりますけれども、号が呑天という。ノンテンとは読めなかったのですが、杉さんに助けていただいたものです。この人は青年社会政策学会を興し、その講演会に福田が出ているときに、吉野作造は浪人会の人たちと有名な討論をしたと記憶しています。

本学の高垣先生の献呈のもの、高島佐一郎先生の献呈のもの。

慶應の高橋誠一郎は濱田氏と共訳した『シィニオア経済学』について、「自分一人でできたものではないけれども、こうやってできたところを見るとやっぱりうれしいです」というような言葉を寄せて、福田に贈っております。

高野岩三郎の、この間の松田芳郎先生の講演のときにも出ましたが、有名な『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告』の統計本が福田に献呈されています。

画家の土田麦僊の弟の土田杏村、その人からも、たいてい献呈の辞は見開きに書かれますが、この書には奥付の方に書かれてあって、たまたま見つけたものです。

徳富蘇峰の本、やはり立派な字だと思います。

何といっても穂積先生です。『五人組制度論』、本文にも書いてあるのですが、「本編中の比較研究は学兄の親切なる助言によりて起案したるものなり。茲に深厚なる謝意を表す」という穂積博士の文章があります。福田徳三が噛みついたにも拘らずこの大学者は福田に謝意を表し、次の論文は福田の提言を入れて批判に耐え得るものにしました。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という例えが当てはまるような大学者の謙遜さを知る思いがいたしま

した。その穂積陳重の息子の重遠も、黎明会で福田と行動を共にしていましたが、陳重が亡くなってからその著作を福田に寄贈するときに、「亡父穂積陳重の記念に福田徳三先生に捧ぐ」とペン書きをして贈っております。その穂積親子の福田徳三に対する、何と言いますか、思いやりを感じさせる献辞です。

生存権の問題で福田も参考にしたりしました東大の牧野英一博士も、「謹呈　福田博士」、そして「英」とだけサインして贈っています。

その他村瀬春雄先生とか、いろいろなものがあります。

横井時敬は、福田がその農業論を批判したのですが、「講評を請う」というような言葉を添えて献呈しております。

これは実際に物を見ないとちょっと分かりにくかろうとは思うのですが、書簡を張り付けてある神戸正雄博士の書籍もあります。憲法論で福田とは反対の立場にあった上杉慎吉も、やっぱりきちんとした書簡を寄せて福田の評を請うというようなこともありました。時代が少し緩やかだったせいもありますけれども、学者間の交流・学者間のコミュニケーション、そういうものが感じられる思いがしました。

私の福田文庫の調査は和書に限り、和書でも社会科学系の文献に限定されたものでしたが、交通費等を出していただいてこういう調査ができたのは、ひとつの収穫であったと思います。

先程西沢先生と信山社の方との席でも話したのですが、東大の経済学部の先生方は福田に対して冷淡でした。その後も東大の先生方の日本の経済についての著作で、この調査をしているなら福田について研究してあるだろうと思うような本にもほとんど福田への言及はなくて、冷たいものを感じますが、当時の東大の法学の先生方は福田に対して温かい支援を寄せていたように思います。特に美濃部達吉博士などは飲み友達であったようで、交流がかなりあったようです。

報告は以上で、もしご質問等があれば、それにお答えするという形にしたいと思います。

Ⅲ．質疑応答

（大月）　ありがとうございました。こういう直筆のイメージを拝見すると、迫力がありますよね。

（金沢）　そう思います。

（大月）　ええ。この後もまたこういう長い人間関係があったんですね。昔は多分、学問間の垣根というか、学者の数が少なかったというのがあるかもしれないですね。

（金沢）　そうですね。

（大月）　今ですと、日本経済学会などは 4,000 人ですからね。私などは歴史学で（日本経済学会に）入っていませんが、いっぱいいますのでね。

（金沢）　それに分野も非常に今は限定的といいますか限られた専門分野になっていますけど、当時の学者はやはりマルチ人間みたいですね。

（大月）　もう本当に、教養の程度が高い人たちばかりですね。いや、でもこれだけおまとめになる金沢さんもマルチ人間です（笑）。

（金沢）　ただ、こつこつと、バカの何とかです（笑）。

（大月）　ところで、野間口（萬里子）さんとはいつお会いになってらっしゃいますか。最近お会いになってらっしゃいますか。

（金沢）　最近お会いしましたけれども、そもそもは田中秀臣先生が如水会館で福田先生について講演なさったときに、野間口さんをご招待なさったのです。

（大月）　そのとき以来ということになりますか。

（金沢）　はい。そのときには直系のお孫さんも同席なさったのです。でもその方は今はやりの音楽の方をやってバンド結成とかそういうことで東京へいらしたのですがうまくいかなくて、今は九州に戻っておいでです。

（大月）　直系のお孫さんというのは何人ぐらいおられるのでしょうか。

（金沢）　私もまだその 1 人しか聞いておりませんが。学者としては水田満喜様の筋の方で、京都大学大学院…

（杉岳志）　水田隆太郎さんという方だったと思います。

（金沢）　そうですね。

（大月）　農学の方ですね。

（杉）　お知り合いだと斎藤修先生がおっしゃっていました。

（金沢）　その方が学者という程度で、あとこの福田関係からは学者は出てないようです。

（大月）　2 週間前に中路信さんからお電話いただきまして、明日というのはそのときの明日なんですが、野間口さんのところにお出でになるんだと言っていました。

（金沢）　はい。野間口さんからも中路さんがいらして、これから交流が続きそうです、みたいなお葉書をいただきました。

（江夏由樹）　蔵書印のお話がありましたが、蔵書印を押された先生方は多かったのでしょうか。

（金沢）　最近はないですけど、昔の本はそうですよね。外国のものは蔵書票ですか。

（江夏）　私は学生のときに北京で蔵書印を作った経験があります。陰刻と陽刻の組み合わせで、結構良い値段でした。自分の本にこれを押そうと思ったのですが、友達から本が売れなくなるからやめた方が良いと言われました（笑）。

（金沢）　私からも質問があります。実は「おしまいに」の、「しろうとの歴史」のところで「一橋の歴史学はしろうとの歴史という伝統が感じられる」と書いたのですけれども、今回の『書誌』のチラシで福田徳三は「近代経済学の先駆者」とか「大正デモクラシーの先駆者」などというキャッチフレーズを使いましたが、確かに先駆者ではありましょうけれども、福田先生は先駆者止まりの位置づけでいいのかという思いがすごくいたします。その辺はどうなんでしょうか。

（大月）　いかがですか。西沢先生。

（西沢保）　今の「しろうとの歴史」というのはどういうことでしたか。

（金沢）　三浦新七先生が言った言葉なのです。それを増田四郎先生が引用されて、「しろうとの歴史」というのはこういうものではないかとひとつの解釈を示されていて、実用を離れない学問だということ。一言で言えばそういうことでしょうか。中山伊知郎先生も労働問題で福田徳三を取り上げるのではなくて、『日本経済史論』を講談社から復刻したいと思っておいででした。そういうところにも私は「しろうとの歴史」という一橋の伝統があるのではないかという思いがしましたのと、福田徳三が田口卯吉の歴史観を紹介するときに、当時の錚々たるどころかむしろ長老格とも言うべき三上参次博士や黒板勝美博士の田口卯吉論に対して、大いに異議を唱えて論じているのですね。そういうところなんかも、福田博士は日本史専攻ではなかったけれども意気込みといいますか、気概といいますか、そういうところの伝統をやはり中山先生もお持ちだったのではないかなとか、いろいろ思った文章をここで書いたのですけれども。

（西沢）　今のお話で、そこら辺はいかがでしょうか。そういうような「しろうとの歴史」ということにつきまして、田崎先生はどういうようにお考えでしょうか。

（田崎宣義）　僕は学問的な福田先生のお仕事が全然分からないので直接のお答えはできませんが、まずこういう浩瀚な、そしてさっき 3 本柱っておっしゃっていましたけど、周到なお仕事で非常に感嘆しました。それで個人的には、話題を変えてしまってお恥ずかしいのですが、大学が国立に移転するときに、どうも福田先生がかなり重要な役割を果たされているんじゃないかというところまではたどり着いて、それで先ほどの年譜の関東大震災の後のところで読んでいきましたら、私が目を通したことのない資料をたくさん引いていらして、その中で福田先生が国立への移転で学生さんとやりとりをしている、そういう話が出てきて、ああ、やはりと思って本当に印象深かったのです。

それで伺いたいことがあるのですが、先生は地震がとても嫌いだったという話を他で少し読んだのですが、そういう人柄というか、その辺で印象深い点を伺えればと思います。

（金沢）　それは大変な思いをされたと思います。地震は誰も好きではないでしょうけれども（笑）。あのときの自分が子ども時代に遊んだところも、みんな跡形もなくなった衝撃を書いておられますけれども、その後も奥様同伴でいろいろな被災した跡なんかも巡ってらっしゃいます。やはり 2 度とああいう思いはしたくないという思いが強かったんじゃないでしょうか。

私が福田先生の書いたものを読んでいると、とにかくアメリカと戦争してはならないと

いうようなことも書いてありますし、戦争とかそういう人々が不幸な目に遭うことは徹底的に嫌いといいますか、あってはならないという信念が非常に強かったんじゃないかなと思います。お巡りさんが嫌いだったのは、幼児体験で線路に石を置いて交番に引っ張っていかれたというがあります（笑)。

（金沢）　西沢先生、その経済学における福田徳三の位置づけというのは。

（西沢）　その辺がなかなか難しいですね。先駆者止まりという理解でいいのかということですよね？ちょっと即答はできませんが、私は自分の関心で福田の処女作といいますかブレンターノとの『労働経済論』、あれは福田自身が新しく書いた本というのではないわけですが、あの本のひとつのアイデアは比較的最近の労働経済学、最近といってもかなり前から言われていることだと思いますが、効率賃金仮説というか、そういうことに近いことを福田はそこで書いていますね。

それから中山先生が「福田徳三と厚生経済学」で言っておられるように、『労働経済論』で福田が言っていることは、中山先生の賃金倍増論あるいは所得倍増論のアイデアのひとつにされたわけですね。ですからよくは分りませんが、先駆者止まりというだけではないのではないでしょうか。要するにあまりそれ以上に福田の位置づけのようなことが必ずしもされていない、福田研究そのものがたとえば河上肇研究と比べると、さきほども話に出た宮島英昭さんとかいい研究もいくつかあるわけですが、相対的にやはり福田の研究が遅れているということもあって、その先駆者止まりという理解にとどまっているのではないでしょうか。

今後、たとえば福祉国家とか福祉社会とか、すでに山脇さんとかが言っておられるようなことを、もう少しエビデンスベースといいますか、それで研究が進んでいくのではないでしょうか。

（金沢）　慶應の座談会で高橋誠一郎先生（1884～1982 年）が、福田先生が黎明期止まりの扱いを受けているというのは非常に残念だというようなことを、かなり前から言ってらっしゃいます。それからあまり進んでないということでしょうか。

（西沢）　それはいつごろの話ですか。

（金沢）　ええと、かなり前です[5]。

（大月）　高橋誠一郎さんがいる時期ですから、それは古いですよね。ところで、「しろうとの歴史」ということについてですけれども、これは三浦先生がおっしゃって、増田四郎

[5] 『慶応義塾大学　講座経済学』 附録 「現代の経済」第 2 号　(昭和 12 年 12 月号)。

先生がずっと言っておられたこととして承知しています。

私はこの大学のヨーロッパ史研究に魅力を感じまして 30 年前に入れてもらったのですが、そのときにはまったく不勉強なことで、福田徳三先生という方が歴史家であるということを理解していませんでした。三浦新七先生のお名前はもちろん存じ上げて、ある種の憧れを持って門を叩いたという自覚があるのですけれど、福田先生という方は、経済学者だということで、名前を拝見することはあっても、歴史家であったとは理解していなかった。でも今、私も 30 年ほどぼちぼちと勉強を進めてきて、福田先生という方は、まったくもって歴史家でおられたのだなという印象を強くしています。

歴史学派経済学の地ドイツに行ったという外形的なことで語る方も多いかもしれませんがそういうことではなくて、「ドイツ」の社会と経済の仕組みについて、大袈裟にいえばシステムを直感的に把握され、またじっくりと分析なさったように思うんですね。パリにも滞在されて 1 年以上おられるはずなんですけれども、そのときに山口茂先生などがお邪魔してご夫妻のところに乱入したといった書き方をしているのですが、福田先生はそのとき奥様をそっちのけでラテン語の勉強をしておられた、なんてことを伝えています。要は、フランスだったらフランスの社会の個性というんですか、特性を掴まえるべく努めておられたのだ、と私はそういうエピソードから推察するのですね。

ヨーロッパ研究は、英独仏の 3 国史研究で進展したわけですが、それは言うまでもなく殖産興業の近代化を進める日本にとって重要な課題だったからでしょう。この学校はそういった近代化を進めるための人材を育成するところですから、目的意識はもう明確にあるわけです。金沢さんがお書きになっているように、増田四郎先生もまたそういう明確な目標設定のもとで自らの研究を意味づけされ、策定され、そういった実用的な関心を持って勉強をしろ、と教育活動をやっておられた。福田・三浦両先生の昔から、一橋はそういう学風なんだ、といったことを繰り返し書かれておられます。

ですから上原専祿先生や増田先生は、あるトピックを選び、史料と格闘することがどういう意味を持つか、そういった点を掘り下げろ、ということを常々おっしゃっていたようですね。

史料そのものがマテリアルとして残っているということは、その社会でそれを残したい人の意欲というものがある、ということもおっしゃっている。書かれていることが本当かどうか分からないけれども、書いて残した人の意欲は確実にそこに残されている、というきわめて正しい認識ですけれども、それを強調されるのですね。そういったメタ史料の関心は、帝国大学などでなされていたいわゆる 19 世紀的な実証主義的史学ではあまり問われない観点です。その史資料そのものが持っている生々しい迫力のある現実をも含めて考えろ、と。そこは確かに素人くさいと思うんです（笑）。

そういった史料として結晶化している人間の意欲と意欲のぶつかり合いの中に歴史の現実があるというようなことを、どうも研究関心に据えておられたようなんですね。たしか

に素人くさいんですが、そこのところはぜひ今の学生たちにも伝えたいと、私なども思っているんです。取り澄ましたように、何年に何があったといったことではなくて、そういう現場に共感できるような心性を持てということを、多分福田先生も三浦先生もおっしゃっていたのではないでしょうか。

福田先生と三浦先生はスタイルが違うんですが、この世代の方々に学ばれた、村松恒一郎先生とか上原専祿先生とかもちろん増田四郎先生も、ずっとそういうことを書き残しておられる。実践的な意欲があって、その意欲を実現するためには現実のシステム分析をしなければいけなくて、それは絵に描いた理想論ではなくて現実を踏まえて思考なければいけない。まさにドイツ歴史学派だなと。ドイツではこうだ、フランスではああだ、翻って日本ではどうだ、ということで、日本経済史をやる。そういうところは気宇壮大にしてきわめて素人くさいと、胸を張って「しろうとの学問だ」とおっしゃっていたに違いないなと思うんですね。

少しまったくもって学問的なことではないことを申し上げましたが、おそらくこの福田先生や三浦先生が何をお話しになっておられたかということを想像するにつけ、こんなふうに想像するわけです。

福田徳三が経済学の中で先駆的な位置づけで終わっているというお話ですけれど、それはそれでもご当人としてはいいのかなとか（笑）。先駆というのは、日本の経済学史の中でどういう形の先駆として分析されているんでしょうか。その後の潮流との関係で考えたときに、どの流れの先駆なのか。それとも絶学して、この大学ではもうその後継がないというお叱りを他から受けているんでしょうか。

（西沢）　たとえば山田雄三先生も、福田のそれを厚生経済学の側面で継いでいると思います、中山伊知郎先生も数理経済学の側面でも引き継いでいると思いますし、労働問題の側面でも引き継いでいると思います。ですから、いくつかの分野の先駆者であったと思います。

（大月）　もちろんです。

（西沢）　それからよくは分りませんが、歴史が素人であるというのと同じ意味で経済学が素人であると言いますか、多分そういう側面を福田自身が持っていたんじゃないでしょうかね。

（金沢）　何かこう血の通った、人が生き生きできる、そういう経済学を目指したのではないかなとも思うのですけれども。

（江夏）　それと関連して金沢さんが図書館にお勤めであったからこそできたということ

に、福田の人間関係を記録から丹念に追われたことだと思います。私たちも研究者ですから机に向かっている時間は多いですが、自分自身を振り返っても、ちょっと遠い世界、ちょっと離れた世界の人との付き合いの中で自分の世界を広げていくということはよくあると思います。

一橋が単科大学だということと関係があると思いますが、ここではいろいろな世界の人が比較的自由に話をできる環境にあります。たとえば文学部であれば、大月さんと私が一緒の場にいることは必ずしも多くないと思います。西洋史と東洋史の世界はかなり違う世界になります。しかし一橋では、学説史の西沢さん、日本史の田崎先生ともこのように日常的にいろいろとお話できます。こうした学問的な広がりが日常的にあるということが一橋の特長であったのかもしれません。

そうしたなかで、福田先生がどのような世界を作っていたのかということは興味ある点です。おそらく四六時中、本を読んでいるときもあったでしょうが、意外といろいろな人とお酒を飲み、おしゃべりして、そこで作り上げてきた世界もあるのではと想像します。もちろん、そうしたことはなかなか検証できないかもしれませんが、金沢さんのお仕事の話を聞いて、そうした福田先生の世界の存在を想像しました。

（大月）　そうですよね。いろいろな人が『書誌』には出てくるのですけど、それぞれの人とのお付き合いの在り方、飲み友達だったとかも含めて、そういう関係性のなかで切り結ばれるお話が実はそのときどきの福田なりの一生懸命になるトピックになった可能性というのは、捨て切れないわけですね。そういう人的なネットワークみたいなものを今日勉強させていただけて、やっぱり金沢さんならではだなと。このお話の会を、シリーズでお願いできればと思いますけれど（笑）。

他者が書き残した福田徳三像がいろいろとこのご本には盛り込まれていて、もちろんこれだけのものですから、今日はちょっと全部拝見させていただくことができずに来ているんですが、もう 1 回勉強させていただいたうえでまたお話など、その後のご研究の成果などを伺わせていただきたいと思っているところです。本当にありがたいと思います。他の皆さん、いかがですか。

（西沢）　河上肇の書誌は天野敬太郎さんで、金沢さんは福田の書誌をということですが、書誌としておそらくこういう大部で立派なものは、多分他にはないでしょうね？

（金沢）　ちょっと珍しかろうと思います。

（西沢）　ですから大変な作業だったと思います。先ほど「読める書誌」とか、あるいは伝記的なものとかというお話でしたが、ある意味でそれ以上になっているだろうと思いました。先ほど「大塚先生が福田博士の伝記を書いたとしたら」というお話の中で、大塚先

生は伝記を書く前にまず準備として日記とか書簡とかそういうものを整理すると、そういうことが急務だというように大塚先生がおっしゃったということですけれども。

この『書誌』もそうだと思いますが、大塚先生にもそういう研究の基盤整備といいますか、そういうものを作ろうとする、それが多分一橋のひとつの伝統ではないかと思うんです。書誌というのはおそらくひとつの公共財のようなもので、大塚先生がそのようにおっしゃったのとパラレルで、こういう立派な書誌ができたことでこれから研究をしていくうえで非常に参考になると思います。

（大月）　ありがとうございます。今のお話でおそらくこれからいくつかの学会で、これ書評として取り上げられるのではないかと思うんですね。

（金沢）　『大塚会会報』には杉さんが書いて下さることになっています。

（大月）　そうですか。他にこの『書誌』について書評・紹介のお話など伺っておられる方ございませんか。杉さんの周辺でどなたか執筆可能性のある方がいたら、ご紹介下さい。おそらくいろいろな学会が、この『書誌』を取り上げて紹介書評をすることになると思います。

（金沢）　そんなに売れてはいないと思います。

（大月）　いや、ですから出版そのものがまだ周知されていないところなんだと思います。もう少し書評や紹介が出てこないといけない段階ですね。

（江夏）　書評が出るとやはり売れるのでしょうか。

（大月）　そのようですね。今は情報過多ですから、ある程度内容についての評価をガイドにしているようです。金沢さんの方では、いろいろな学会誌の書評としてどういった方に書いてもらいたいとお考えでらっしゃいますか。

（金沢）　いえいえ、私は特にはありません。

（大月）　それではまた後で、個人的に伺わせていただくとします。他にいかがでしょうか。今日のお話、あるいはこの『書誌』の中の記事に関して。

（西沢）　河合栄治郎の日記に、河合は福田を東大の社会政策にはうんぬんというお話がありましたね。河合さんはどういうことを書いているんですか？

（金沢）　山崎覚次郎先生から福田に社会政策学会をやってもらうのは困るから、お前がやれと言われたという。

（西沢）　お前がというのは河合自身がですか？

（金沢）　そうです。河合先生は日記で福田の何でしたっけ、ちょっと度忘れしたのですが日記で、福田の著作の社会政策に関して、第 1 章はいいのだけれども 2 章からつまらなくなって、こんな人はもうこれでお終いだみたいなことを書いたりしていますね。けれども河合先生ご自身の社会政策学もどうだったのでしょうか。あまりに東大で勢力を持ちすぎて批判もあんまりなくて、私は何か学者としてはちょっと正当に評価されないでしまったのではないかというような気がしてなりませんでした。

それとこの間、名前が出てこないんですけど、確か中公新書で京都大学出身の先生でラングのエコロジーみたいな本を著わした先生が、ラングじゃなくてイギリスの美術論をやった人。

（大月）　ラスキンですね。

（金沢）　そう、ラスキンです。ラスキンのエコロジーで、ラスキンがかなり古典、アリストテレスからいろいろやって、ああ福田先生もこういうところで晩年アリストテレスにまでさかのぼったかなという印象を受けたのです[6]。

（大月）　そうですね。もちろん先ほど申し上げた、福田先生がパリでラテン語を勉強されていたというのは、トマス・ダキノ（トマス・アクィナス）のアウグスティヌス解釈とか、そういったとても素人の学問とは思えないようなレベルでの古典学をやっておられたという、その場面らしいんです。そういう研鑽の中でトマス・ダキノ研究があって、そこからまた五百籏頭眞治郎さんや上田辰之助さんですか、そういった方々がお出になったわけです。

何て言ったらいいんでしょうか。ある規格化された、すでにパッケージ化された学問が日本に輸入されてきたときに、そのパッケージそのものを見渡すような形で多分福田先生はご覧になった。そしてその体系の中で、箱庭のようにやる学問ではなくダイナミックに動く社会の律動の中で、そういう規格になったんだ、といった観点でお考えになったような印象です。

オルタナティブな規格というのはいくらでもあり得るわけですね。世の中、動いている。

---

[6] 『経済学の哲学：19 世紀経済思想とラスキン』伊藤邦武著　中央公論社 2011.9　中公新書。

19 世紀後半なんていうのは、まったくそういう激動の時代です。かたやマルクスも出てくるわけですから。ああいう人が出てきて、世人を扇動して歴史が展開してくるわけですから、おそらくそういったことも含めて、この先生は学会に対して発言なさっておられたのだろうという気がしてきます。この『書誌』を拝見しても、それが何となく確認されたというのが、私の印象なのですが。

（杉）　金沢さんのおっしゃった、「読める書誌」という点がこの本の大きな特徴だと思うのですが、どのようなきっかけでそのような書誌を作ろうと考えられたのでしょうか。

（金沢）　決してリストだけの書誌でもつまらなくはなく、私なんかは読んでいてもそれはそれでいろいろな情報が浮き出てきてつまらなくはないのですが、一般の人が読むにはいつも書誌は無味乾燥というようなところがありますので、自分だったらこういうことを書いて欲しい、研究者がこういうことを書いているんだからこういうことを知りたいという自分の好奇心といいますか、そういうものがこんなふうになったんだと思います。

（大月）　日本語の書誌で、これほど肉があり血が通っているような証言がコンテンツとして盛り込まれているものって、ほとんど出合わないという印象があります。というより、ほとんどはじめて出合ったと思っているのですが。

（金沢）　天野先生の書誌は論争についての解説みたいなものは載っているのですが、社会科学系の書誌というのはそもそもそんなに多くはないです。文学者の個人書誌なんかが主流です。

（大月）　そうですね。明治・大正期の文壇の交流などは多いですね。さて、他にいかがでしょうか。酒井さん、せっかく来ていただいて、何かおありでしたら。

（酒井雅子）　如水会事務局におります酒井と申します。関一が大阪商科大学を作りましたときに、上田貞次郎に学長になってくれという依頼があり、上田先生が「悩んだけれども、周りも反対するしやめた」という記述が上田貞次郎日記にあります。それから福田徳三にも対しても学長になって欲しいという意向が大阪商大側にあったことが、有恒会（大阪商大同窓会）の記録にあります。たまたま 3 年ほど前に如水会の仕事を通じて、関一の孫の関淳一さん（元大阪市長）と何度かお話をする機会を得ました。関一の刊行されていない部分の日記や手紙などがまだ大阪市史編纂所にありますので、昨年拝見してきました。関一の日記や、一昨年から甲南学園で刊行が始まった『平生釟三郎日記』を合わせて見ると、関西に在住していた一橋出身者・京高商出身者が非常に人的交流を持っていることがよく分かります。さっき江夏先生がおっしゃったことはまさにそうなのですけれども。

特に多かったのは明治 30 年代以降の卒業生で外務省に就職し領事になった人が何人もいて、その人たちが日本に帰国したときに周りに高商の同窓生が集まって、いろいろ海外事情を聞く集まりです。『平生釟三郎日記』には非常に詳細に書いてあります。当時は今よりも情報が限られていたのですが、こういう情報交換もあったのだなというのを知りました。

おそらく福田先生も何らかの形で、そういった領事らが日本に戻ってきたときに、海外の情報を入手するということもされていたのではないかと、さきほどお話を伺っていて考えておりました。福田先生ご本人の日記があれば、それが記されていたのかもしれないですけれども。これはむしろ江夏先生が一番お詳しいと思いますが、日本にとって非常に戦略的に重要と思われる都市に、高商出身者が領事になっていました。それから一方で、高商の出身者の勤務先で非常に多かったのは三井物産、横浜正金銀行、日本郵船等でした。彼らが現地でも非常に有機的な情報交換をしていて、一方で福田徳三先生のようなヨーロッパへ行って帰ってこられたような先生方もいらして、国内外で濃密な交流があったというところに、ある種の本学の特色が醸成されていったのではないかとも考えます。

『平生釟三郎日記』はすでに刊行されている 4 巻だけでも、関西において一橋という学校の卒業生どうしで濃密な情報交換が結構な頻度でなされていたというのがよく分かります。『如水会々報』などには、ごく一部しか出てこない部分です。たまたま誰々が帰国しました、大阪におりまして、みたいなときにも必ず集まって、中国情勢やアメリカ情勢等を話題にしています。

福田先生の思想なり学問の背景にも、そういったところがおそらく出ていたのだろうと思えるのです。だから逆にそういった記録の中から、今後は福田先生のお名前が出てくるようなものを探していくと、そっちがまた逆にあぶり出されてくるかなというふうに今お話を伺っていて考えておりました。

（大月）　今のお話で言いますと、たとえば後ろに出てくる武井大助さんという方がおられて、もちろん有名な方ですし福田の門下なわけですけど、行くところ行くところで昔の方々というのはしばしばお手紙を書かれているんですよね。その断片が残っている。まあ、たぶんクロノロジーも作れると思うんですが、そういった福田先生に対する武井大助さんみたいな人はいっぱいいるわけですよね。

ここの卒業生には、外務省に職を得た人はいっぱいいますね。武井は違いますけれども、それがみんなそういった形で福田先生のところに手紙を送っていたりするとかということがあったとすれば、大いにあったわけですけど、すごい話ですね。誰か帰ってくるというと、ばっとまた集まるというのは、その通りですよね。そういったことについての情報整理は、まだないですね。

（酒井）　それを一個一個丹念に拾っていく作業ですね。たとえば、関一研究などは大阪

市立大学の先生方を中心に何人もなさっておられますけれども、そういった先生方からすると「如水会って学閥強いですね」みたいな感じで、そこから先にはあまり入っていかれないのです。ところが私たちから見ると、集まっている人間の固有名詞が引っ掛かりますから、この人は何年卒のたとえば三井物産勤務でこのときにはどこどこの支店長で、ということから縦横のつながりが分かってくるように思います。実はちょっとそれに類したことで、東京高商の同窓会支部の人間を、年次と地域・勤務先で輪切りにするという作業を少し始めております。

（江夏）　おっしゃる通りで、昔の旧高商の世界は今よりずっと小さなネットワークからなっていたという印象をもっています。学校を出た人の数がそもそも少ないですから。そこでの人間関係というのは、我々には想像できないほど情報に満ちていたでしょう。そして情報の交差点になる人というのは、今の時代だって必ずいるわけで、彼に話をしておくとだいたい話が全体に通じるということはありますね。　だから福田先生がひょっとすると、ご本人がそうではなくても、福田門下生たちがそういう役割を果たしていたのかなって、想像したくなります。

（杉）　福田ゼミの出身者って意外に少ないですよね。同時期の上田貞次郎ゼミなどに比べて、ゼミ生の数はずいぶん少なかったように記憶しています。福田先生ぐらいビッグネームだとゼミを超えたネットワークがあったのでしょうか。

（大月）　なるほど。

（西沢）　福田先生が高商を追われて慶應に 10 年以上いたじゃないですか。その間にはここのゼミ生というのはいなかったんでしょうね？

（金沢）　やっぱり厳しくて怖くて、そんなに大勢の人数が入るようなゼミじゃなかったと思います。

（大月）　いや、私が聞き及んでいるところで、どこかで見たのかもしれませんけど、最初ゼミナールに入る人は、それなりに人数いたんですって。だけど途中で脱落して出てこないとか、お前はクビだと言われたとか。卒業までいたのが 2〜3 人という、そういう話でもあったようですね。

（杉）　すぐクビだというのを仲裁するのが自分の役目だったと、大塚金之助がどこかで書いていました[7]。

[7] 『如水会々報』303、1955 年。

（大月）　そうですか。なだめるというのはそれで留め置かれるんですか。

（杉）　そうだと思います。かっとなって、すぐ収まる人だったのではないでしょうか。

（金沢）　そうです。それでそうやって怒っても、学問そのものはすごく評価する、公正に評価するというようなところもありますから。

（大月）　上田正一さんがおっしゃっているわけですが、上田貞次郎先生もずいぶん破門されたようで、言われた方は最後まで何かおっしゃっていたようですけど、言った方はまったく意に介さず、またけろっと付き合っているって（笑）。

（金沢）　河上肇はそういうことをすぐに察知したようで、福田先生はすぐ忘れるから、そんな福田先生についてくよくよする必要はないんだよって、言っていますしね。福田徳三の情報は、人脈みたいなこともおっしゃいましたけど、何せやっぱり語学が達者でしたから、文献を読むのも速いし入手するのも一生懸命だったから、文献情報も福田は人一倍多かったと思いますし。いろいろ失われていますが、海外の学者との書簡のやりとりなんかもあって、海外情報もかなり入っていたんじゃないかなと推測します。

（田崎）　福田先生は、海外で出た本などの情報の入手もとても速く、特殊な情報網を持ってらっしゃったようですね。全体に書誌というのは論文リストか著作リストで、その方の人柄とか人間像とかはなかなか分からない書誌が多いという印象を持っていましたが、この『書誌』は全く違いました。今までのお話にも出ていたように、詳細な資料を引いていらして、私は先ほど申し上げたように関東大震災のところから読み始めたのですが、福田先生の人柄というのか、学生から見た福田先生とか、福田先生が学生にどう働き掛けていたかとか、ほとんどの書誌では触れられない側面を丹念に構成されて、福田先生の人物像が生き生きと伝わってきます。先ほど金沢さんが言っていらした「読める書誌」として、とても素晴らしいと思って感激しました。

　しかも人物史や伝記に比べて資料的な裏付けがしっかりしている。金沢さんは人物史を書く筆力を十分にお持ちなことがよく伝わってきましたが、そうではなくて資料で人格を語らせようという、そこが強い迫力を生んでいると思いました。福田先生についてのイメージがとてもよく分かり、大変に興味深く読ませていただきました。「読める書誌」というのは本当にその通りだなと思って感激しました。川崎操さん以来の商大のライブラリアンの伝統をみごとに引き継いで大きく開花させた業績だと思います。

（大月）　そうですね。本当に今、田崎先生がまとめて下さった通りで、どこから紐解か

れても、資料をして語らしめるという手法をお採りになってらっしゃいますが、それこそ金沢さんのお人柄がここににじみ出ていて、二重の意味で感激をさせていただいたなという気がします。

（金沢）　いいえ、私の人柄ではなくて、文献と人を結び付けるというのがライブラリアンの役目です。

（大月）　なるほど。ということでそろそろ時間も回ってきましたので、このあたりで今日は終わりにさせていただくのがよろしいかと思いますが、いかがでしょうか。今日はどうもありがとうございました。また今後ともよろしくお願いいたします。

＜研究会終了＞